

# ジョン・スミスの哲学的思考の型について ——「真の宗教の卓越性・高貴性」についての講話——

## 三上 章

キーワード：ジョン・スミス、ケンブリッジ・プラトン学派、プラトニズム、哲学、宗教  
John Smith, The Cambridge Platonists, Platonism, Philosophy, Religion

### はじめに

政治紛争と神学論争が激しく錯綜した17世紀イングランドの内戦時代(1642-65)と重なる1633年から1688年にかけて、ケンブリッジ大学において古典文献、特にプラトニズム関連文献を学び、学寮チャペルでの説教・講話に従事した一連の哲学的神学者または神学的哲学者が存在した。そのなかに数えられるのは、ベンジャミン・ウィッチコット(Benjamin Whichcote, 1609-83)、ラルフ・カドワース(Ralph Cudworth, 1617-85)、ヘンリー・モア(Henry More, 1614-87)、ナサニエル・カルヴァウエル(Nathaniel Culverwel, 1618?-51)、ジョン・スミス(John Smith, 1618-52)、ピーター・ステリー(Peter Sterry, 1613-72)の6名である<sup>1)</sup>。彼らに共通するプラトニズム的思考の型のゆえに、現在、研究者たちによって「ケンブリッジ・プラトニスト」(The Cambridge Platonists)と呼び慣わされている。この呼称の他に、彼らのごく早い時期から「広教の人たち」(Latitude-Men)、あるいは「広教主義者たち」(Latitudinarians)とも呼ばれていた。これらはすべて、彼らの哲学的な広いものの見方に反対するキリスト教守旧派や熱狂主義的キリスト教の側が付けたレッテル的評価である<sup>2)</sup>。なお日本語では通常「ケンブリッジ・プラトン学派<sup>3)</sup>」という訳が用いられるが、「学派」といっても、必ずしも彼らが強くそのように意識したということではない。しかし、彼らにはゆるやかではあるが、思想上の連続性があることも事実である。クライスツ学寮(Christ's College)で学んだヘンリー・モアを除く全員が、ピューリタンの牙城であるエマニュエル学寮(Emmanuel College)でプラトン、アリストテレス、プルタルコス、およびキケロー、プロティノス、オリゲネス、シンプリキオスらを、さらにはデカルトやホッブスらを読み、思索を養った学徒たちである。

17世紀イングランドは、政治・宗教・哲学において経験論哲学とピューリタニズム宗教

運動という二大勢力が大きな影響を及ぼした時代であった。それらの狭間にあつて、ケンブリッジ・プラトニストは小さな存在であつた。一方において、啓蒙の唱道者たちからは宗教的反動主義者とみなされ、他方において、ピューリタニズムの論客たちからは宗教的無関心主義者と批判された。しかし、カッシーラー (Ernst Cassirer, 1874-1945) が正しく指摘するように、両者はともに、ケンブリッジ・プラトニストの信仰の広さによって開かれるはずの、新たな深さ、別の次元を見きわめることができていなかった<sup>4)</sup>。

ケンブリッジ・プラトニストの一人に数えられる、若き宗教哲学者ジョン・スミスは、1636年、エマニュエル学寮に入学し、8年間にわたる研鑽の後クィーンズ学寮のフェローとなり、続いて学生監を兼務した。34歳で病没するまで肅々と講義と講話を行った<sup>5)</sup>。そのなかで、古典古代の文献、特にプラトニズム関連文献の広範な引用に基づき、独自の哲学的思索を展開した。その思索の一端は、遺稿集である『講話選集』(John Worthington, ed., *Select Discourses*, London, 1660) からうかがい知られる。本稿は、そのなかに収録されている「真の宗教の卓越性・高貴性」(*The Excellency and Nobleness of True Religion*) に関する講話<sup>6)</sup>を取り上げ、キリスト教と哲学の協働あるいは相互作用という視点から、スミスの哲学的思考の型を吟味する試みである。

この講話は、一言でいえば、宗教のアレテー (ἀρετή, 卓越性) は何か、宗教をして真に宗教たらしめるものは何かという問題を解明しようとするものである。真の宗教における成長・発展という観点から、1. その起源・原型 2. その性質・本質 3. その特性・働き 4. その前進 5. その期間・終局、の順序で展開される。

キリスト教と哲学の協働・相互作用の思考形式は随所に見られるが、本論文では三つの事例においてそれを吟味する。第一に、説教題と聖書箇所である。第二に、真の宗教の性質・本質である。ここでは、①善き者は、真の宗教によって行動に駆り立てられ、この世の楽しみや栄誉を超出して生きる。②善き者は、自己の理性との交わりのなかに生きる。③善き者は、自己を超出し、神性との親密な交わりへ上昇させられる、ことが論じられる。第三に、真の宗教の特性・働きである。この部分は講話の主要部分であり、以下のことが論じられる。①真の宗教は、善き者の魂を気宇広大にする。②真の宗教は、善き者が理性による我意を抑制することを可能にする。③真の宗教は、善き者が至高の存在である神の栄光のために生き、神に似た者となることを可能にする。④真の宗教は、善き者の魂に真の平静と言葉に尽くせぬ喜びをもたらす。⑤真の宗教は、善き者の魂が聖なる大胆さをもって神に近づき、謙遜をもって神との親密な交わりをもつことを可能にする。⑥真の宗教は、善き者の魂を地上のものから神のものへ、感覚界から叡智界へ携え上げる。⑦真の宗教は、善き者の魂が神の摂理と神の意思に心から従うことを可能にする。

これら三つの事例において、キリスト教と哲学の協働・相互作用という観点からスミスの

議論がどのように展開されているかを吟味し、その哲学的思考の型の特色を明らかにしたい。

## 1 説教題と聖書箇所

この講話の扉部分においてスミスは、題目と論述順序を示した後、以下のように『詩編』からの引用と、それと並んでナジアンゾスのグレゴリウスからの二つの引用と、パウリヌスによるヒエロニムスからの引用を提示している。このような聖書と教父の並記は、ケンブリッジ・プラトニストに共通した特徴である<sup>7)</sup>。

### 詩編 16章 3節

「地にある聖徒たちには、すなわち、私の喜びのすべてである卓越した者たちには<sup>8)</sup>」  
ナジアンゾスのグレゴリウス『演説』 8.6

「高貴性とは、似姿の保持であり、原型に似ることである。それを実現するのは、理性とアレテー（卓越性）、および淨い情念である。」

ナジアンゾスのグレゴリウス『演説』 25.3

「私が言う高貴性とは、多くの者たちが考えているようなものではない。そうではなく、それは敬神と品性が形成するものであり、そこから我々が生成したところの究極の善への上昇である。」

パウリヌス『ケランティアへの手紙』<sup>9)</sup>

「宗教は、我々のうわべの顔や、人間の業績を受け入れることはできない。そうではなく、宗教は各自の魂を吟味する。奴隷にも高貴な者にも死について宣告する。ただ神のところのみ、罪に隷属しない自由がある。神のところにも最高の高貴性があり、それはもろもろのアレテー（卓越性）で輝いている。」

スミスはこれらの文言によって、聴衆の心を「卓越した者たち」になることへ勧奨し、それを実現する動力としての宗教のあり方、すなわち「高貴性」に関心を引く。それゆえ、講話の題目は「真の宗教の卓越性・高貴性」となる。

スミスが講話を語る目的は、自分自身が聖書の言葉に聴き、その深い意味を探り当て、それを適切に講解することである。彼が選択する聖書箇所は、箴言 15章 24節である。“The Way of life is above to the wise that he may depart from hell beneath.”（欽定訳）。新共同訳は、「目覚めている人には上への道があり、下の陰府を避けさせる」である。それに続いて、前書きとして、その聖書箇所から自然に引き出されるとされるいくつかの所見を述べる。このあたりの手順は、当時のピューリタン説教者の説教形式に合致している<sup>10)</sup>。

スミスの講解は前置きから始まる。冒頭で、聖書の言葉に触れるとはどのような体験であ

るかについて述べる。

In this whole *Book of the Proverbs* we find Solomon, one of the Eldest Sons of Wisdom, always standing up and calling her blessed: his Heart was both enlarged and fill'd with the pure influence of her beams, and therefore was perpetually adoring that Sun which gives light.

『箴言』全体において、知恵の長子たちの一人ソロモンは、常に立ち上がって知恵を祝福している。彼の心は知恵から発する陽光の純粋な影響により拡大され、その影響に充満されている。それゆえ彼は、光を放つかの太陽を絶えず称えていた<sup>11)</sup>。

スミスはまず「知者」(the wise) という言葉に着目する。伝統に従って、ソロモンを『箴言』の著者とするが、彼にとってソロモンは知者の一人である。知恵を敬愛してやまないその姿は、愛智者としての哲学者のそれである。太陽に喩えられる知恵の陽光に浴したソロモンの心は、プラトン『国家』篇における、太陽に喩えられる善のアイデアを観照する哲人統治者の魂<sup>12)</sup>と重なる。スミスにとって、ソロモンに象徴される愛智者の生の正当性は、新約聖書の明示するところである。キリストは、「知恵はそのすべての子どもたちによって正しいとされる」(ルカ7章35節)と言った。知恵なるキリストあるいはキリストなる知恵は、それを敬愛する者たち、またはキリストの弟子たちから歓迎される。他方、その価値を理解しない者たちから拒絶される。その拒絶のありさまはヘブライ語聖書に示されている。『イザヤ書』に、苦難の僕なるキリストに対する人びとの拒絶が予示されているが(53章2節)、それはとりもなおさず知恵に対する拒絶である。翻ってプロティノスの言葉では、「(知恵に)触れていない者たちにはいかなる理解がありえようか<sup>13)</sup>」となる。神的知恵に対する内なる感覚に動かされていない心は、その真価を評価することができない。かくしてスミスの考えでは、新約聖書、ヘブライ語聖書、そしてプロティノスがこぞって、愛智者としてのソロモンの道に従うことの正しさを立証している。

スミスは、聖書の言葉に触れる体験についてももう少し踏み込んだ説明を行う<sup>14)</sup>。すなわち、ソロモンは「知恵の楽器」(Sapientia Organum)であり、知恵自身がそれを調律し、それによって自身の神的教説を奏でた。ソロモンの言葉は、ヘブライ語聖書の用語では、神的快き、力、そして美に満ちた「快い言葉」(コヘレト12章10節)であり、ギリシャ語では、「内に大いなる知性をもつ」(πολὴν νοῦν ἔχοντες ἔνδον)<sup>15)</sup>ものだった。ソロモン自身の言葉では、「銀の絵画のなかの金のりんごのごとし」(箴言25章11節)である。スミスにとって『箴言』が知恵の言葉であることの意味は、使徒パウロの言葉でいう「神秘のなかで知恵を語る」

(コリント一2章7節) ことである。日常の表現で語られているとしても、一種の謎のような仕方でも神的真理を内包している。いわば比喩あるいは象徴として、真理を指さしている。この手法は古代の哲学者たちの著作に見られるものであり、聖書でもしばしば用いられている。真理を開くか隠すかは、『箴言』の言葉を読む我々にかかっている。この手法は、神が肉体の制約のなかにある我々に適応させたものである。アウグスティヌスによると、我々が隠喩や寓喩を好む理由は、我々の理性と親密な関係にある我々の感覚と釣り合っているからである<sup>16)</sup>。カバラ主義者の格言にも、「天の光は覆いなしには決して下ってこない」とある。アレオパゴスのディオニュシオスも、「我々にとって神的光が輝くことは、さまざまな聖なる覆いで神秘的に包まれることなしには不可能である<sup>17)</sup>」と述べている。かくしてここでもスミスの考えでは、ヘブライ語聖書、新約聖書、アウグスティヌス、カバラ主義者、そしてアレオパゴスのディオニュシオスが、声をそろえて、『箴言』の言葉が神的真理を内包している比喩・象徴であることを証言している。

以上のことからスミスが引き出す帰結は、以下のとおりである<sup>18)</sup>。「いのちの道」という言葉は、「真の宗教の高貴性と寛大な精神」を象徴している。「上へ」という言葉は、「神的で天的な、高貴で卓越したもの」を象徴している。新約聖書における「上への召し」(フィリピ3章14節)や「上にあるものを思慮しなさい」(コロサイ3章2節)の表現に見られる *ἄνω* が、そうである。アウグスティヌスも、「上にあるもの」(*τὰ ἄνω*, *superna*) を宗教のことがらと理解し、「というのは、その卓越性のゆえに地上のことがらにはるかに優っている」と述べている<sup>19)</sup>。スミスの目的は宗教の外をあげつらうことではなく、「真の宗教の卓越した高貴な精神」を開示することである。「上へ」に対する「下の地獄」とは、「反宗教の低級で下劣な精神」を象徴している。スミスが掲げる「真の宗教の卓越性・高貴性」という題目は、そのような意味をもつ。

スミスはプラトンやプロティノスを、聖書と同列に置くようにみえるかもしれない。しかし、それは皮相な混合・混同ではない。あくまでも聖書が第一である。ただし、硬直した聖書主義の意味においてではなく、聖書が豊かに湛える精神性の意味においてである。スミスは、文字の奥底に潜む霊の源泉を探り当て、そこから飲むことを欲する。そういう次元において、プラトンやプロティノスはよき洞察を与えてくれる。聖書の他にも善きものがあり、それを素直に認めるのがスミスの基本的姿勢である。その点において、概して「異教」に善きものを認めないピューリタン・カルビニズムとは対極に立つ。

## 2 真の宗教の卓越性・高貴性～その本質・真髄

スミスは、真の宗教の卓越性・高貴性の本質・真髄として三つのことを述べる。すなわち、

- ①この世を超越した生 ②理性との交わり ③自己の超出と神との親密な交わり

## 2.1 この世を超越した生

*A Good man, that is actuated by Religion, lives above the World and all Mundane delights and excellencies.*

善き者、すなわち（真の）宗教によって始動される者は、この世とそれに属するすべての楽しみ・卓越を超越して生きる<sup>20)</sup>。

スミスにとって真の宗教は、いわばアリストテレスの言う始動因（ὄθεν ἡ ἀρχὴ τῆς κινήσεως, *causa movens*）である<sup>21)</sup>。これによって始動される質料因としての人間は、善き者と呼ばれる。善き者は、善き心で最高善である真の宗教を愛し、それによって漸進的に善に与り、完全な善へ前進していく。最高善なる神は目的因であり、善き者はそれに向かって上昇していくことにより、やがて完全な善に似た者となり、自分自身の形相をもつことになる。このような道を前進する者は、プラトンおよびプロティノスによって「善き者たち」（οἱ ἀγαθοί）と呼ばれている<sup>22)</sup>。善き者は知者であり、ソロモンに倣い究極の知恵を愛し求める。スミスは善き者の魂について次のように語る。

The Soul is a more vigorous and puissant thing, when it is once restored to the possesseion of its own Being, then to be bounded within the narrow Sphere of Mortality, or to be streightened within the narrow prison of Sensual and Corporeal delights; but it will break forth with the greatest vehemency, and ascend upwards towards Immortality: and when it converses more intimately with Religion, it can scarce look back upon its own converses (though in a lawful way) with Earthly things, without a being touch'd with an *holy Shamefac'dness & a modest Blushing*; and, as *Prophyry* speaks of *Plotinus*, ἐφκει μὲν αἰσχυνομένῳ ὅτι ἐν σώματι εἶν, it seems to be shamed that it should be in the Body.

魂は（本来）もっと生氣・活気のあるものだが、再び自分自身の現存在を所有するとき、死すべき肉体という狭い領域のなかに束縛され、感覚・物質の楽しみという狭い牢獄のなかに拘束される。しかし、魂はあらんかぎりの激しさをもって破れ出て、不死に向かって上昇するであろう。それが（真の）宗教と親密な交わりをもつとき、（たとえ法にかなった仕方であったとしても）それ自身が地上のことがらと持った交わりを、聖なる羞恥と謙虚な赤面の情なしには、ほとんど振り返ることはできない。ポルフィリオスが、プロティノスについて「彼は肉体のなかにあることを恥じている者に似ている」と語るよう



に、魂は肉体のなかにあらねばならないことを恥じているように思われる<sup>23)</sup>。

スミスは、魂のあるべきすがたを、肉体の牢獄を打ち破り、不死の世界に上昇することと見る。その上昇に動力を与えるのが、真の宗教である。魂はその故郷である天にもつばら思いをはせるべきであり、肉体の束縛のなかで地上のことがらに没入することは、愛智者にとって恥ずべきことである。スミスは、肉体のなかにあることを恥じた哲学者として、ポルフィリオスが伝えるプロティノスを挙げる<sup>24)</sup>。スミスにとってプロティノスは、地上のことがらを超越し、天界に思いをはせて生きた愛智者の典型である。

真の宗教に触れた魂が、肉体を超出し、究極の始原へといやましに上昇する道行きが、スミスの考える真の宗教の精髓である。この考え方の基底にプラトン哲学がある。プラトンは『パイドロス』において魂の本来のすがたを語るにあたり、魂の似すがたを、翼を持った一組の馬と、その手綱をとる翼を持った馭者とが、一体になってはたらく力にたとえている<sup>25)</sup>。『国家』のIV巻、IX巻で述べられる魂の「三部分説」との対応関係でいえば、馭者は「理性的部分」に、善い馬は「気概の部分」に、悪い馬は「欲望的部分」に相当する。翼のそろった完全な魂は、天空たかくかけ上がって、宇宙をくまなくめぐり歩くが、翼を失うときに、下落し、死すべき肉体をつかまえて、その固体に住み着く。スミスはそれを「再び自分自身の現存在を所有する」と表現している。地上の生涯において愛智者の生を貫徹した魂は、感覚界から叡知界に超出し、真実在の観照にあずかることができる。他方、上の世界を切望しつつも、愛智者の生を全うできなかった魂は、「力およばず、天の表面の下側から出られないままいっしょにめぐり運ばれ、互いに他の前に出ようともがきながら、踏み合い、つき合いする<sup>26)</sup>」このとき多くの魂が翼を損失し、地上に落ちる。

Whereas on the contrary the Souls of wicked men, ὑποβρύχια συμπεριφέρονται, as *Plato* somewhere speaks, being moistened with the Exudations of their Sensual parts become heavy and sink down into Earthly things, and couch as near as may be to the Centre. Wicked men bury their Souls in their Bodies:

これに対して、悪しき者たちの魂は、プラトンがある箇所で行うように、「天の表面の下側から出られないままいっしょにめぐり運ばれ」、感覚的部分の浸出により湿らされ、重くなり、地上のものなかに下落し、天球のなかに沈む。悪しき者たちはその魂をその肉体のなかに埋める<sup>27)</sup>。

さらにスミスは『パイドン』を引用し<sup>28)</sup>、この世に束縛された生に対して警鐘を鳴らす。

It was the Opinion of the *Academicks* that the Souls of wicked men after their death could not of a long season depart from the Graves and Sepulchers where their Mates were buried; but there wandered up and down in a desolate manner, as not being able to leave those Bodies which they were so much wedded to in this life.

アカデメイア派はこう考えた。すなわち、悪しき者たちの魂は、死後も長いあいだ、彼らの連れ合いが埋葬されている碑や墓から離別できない。落ちぶれた様でその場所のあたりを上へ下へとさまよう。この世の生において強く結合していた肉体から離別できないからである<sup>29)</sup>。

真の宗教の本質を論じるにあたり、スミスは聖書の用語よりむしろ哲学の用語を使用する。キリスト者の天への道行きは、アリストテレスの四原因説が示すように、善き者の魂が真の宗教の動力によって作動され、プラトンが示すように、この世とそれにまつわるものを超越する生に専心没頭し続ける営みである。それは愛智者としての哲学者の生であり、その典型がプロティノスである。スミスは、真の宗教の本質・精髓をそのようにとらえた。この世の超出を目指すスミスの立場は、当時、イングランドを支配していたピューリタニズム、および経験論哲学という二大思潮に対する反論である。ピューリタニズムと経験論哲学とは対極に立つように見えるが、一つの共通点をもつ。それはこの世への関心と実践の強調という点である。ピューリタン・カルビニズムは神権政治の社会体制を熱心に追求め、ホブズは宗教の上に立つ絶対的統治者としての国家を追求した。これに対してスミスが追求したものは、この世の超出と神の観照であった。

## 2.2 理性との交わり

*A Good man, one that is actuated by Religion, lives in converse with his own Reason; he lives at the height of his own Being.*

善き者、すなわち（真の）宗教によって始動される者は、自分自身の理性との交わりのみで生きる。彼は自分自身の存在の頂点において生きる<sup>30)</sup>。

スミスは、理性との交わりが善き者の特質であると考え、プロクロスの伝えるプラトンの言葉を言及する。「アレテーを持つ者だけが自分自身と交わることができ、自分自身を親の愛で愛することができる。」原文は、「なぜなら（我々のような）部分的な動物のなかで、アレテーをもつ者のみか自分自身と交わり、自分自身を親の愛で愛することができる<sup>31)</sup>」で



ある。アレテーをもつ者、すなわち善き者は、自分自身の価値を査定するにあたり、エピクロスがするように、魂における下劣で地上的な部分によってではなく<sup>32)</sup>、「不死なる本質、すなわち上に属する者のそれ」によって行う。スミスはプロティノスの言葉を引用し、善き者は「自分自身のなかの始原へ上昇する<sup>33)</sup>」と言う。さらにストア派の見解に言及し、倫理の教師たるべき者は、人間は「魂と肉体の結合」にすぎないなどという考えを捨て、「理性に従って」のみ生きるように人びとに教えなければならない、と言う。出典は示されていないが、ディオゲネス・ラエルティオスの『哲学者列伝』においても、同様の見解が伝えられている<sup>34)</sup>。スミスはストア派の見解に基本的には賛成するが、その神学に対しては、あまりにも厳格すぎる部分があるとして批判する。それに対して、真の宗教によって始動される善き者は、ストア派の教説を最善の意味において最善の仕方であることができる。いかに「自分自身を畏敬すべきか」という点において、善き者はいかなるストア派学徒よりよく知っている、とスミスは言う。神と最大限に近似している存在である魂に関して自分自身を査定する者は、シンプリキオスの伝えるエピクテトスの言葉でいえば、「力の限り肉体から逃れ、肉体的情念から離れ自分自身へと集中することを欲する<sup>35)</sup>」魂が自分自身へ退くとき、自分自身への聖なる愛にかき立てられ、いやましに「自分自身の榮譽の警護へ<sup>36)</sup>」突き進む。スミスは以上の議論を次のようにまとめる。

To conclude this Particular, A Good man endeavours to walk by Eternal and Unchangeable Rules of Reason; Reason in a Good man sits in the Throne, & governs all the Powers of his Soul in a sweet harmony and agreement with it self.

以上の項目の結論として、善き者は理性の永遠かつ不変の諸法則に従って歩もうと努める。善き者における理性は王座に着座し、その魂のすべての活力を、自分自身との甘美な調和と一致のなかで支配する<sup>37)</sup>。

この見解の基底にプラトンの「魂の三部分説」があることは、明らかである。『国家』によると、魂における理知的部分がいわば王として、気概の部分の協力により、欲望的部分を支配している状態が魂の調和であり正義である<sup>38)</sup>。スミスにとって、真の宗教の高貴性・卓越性の精髓は、真の宗教によって始動される善き者の魂において、理性が哲人王としてその統治を行うことにある<sup>39)</sup>。

他方、スミスは、悪しき者たちの魂の状態について次のように述べる。

Whereas Wicked men live only ζῶν δοξαστικῆν, being led up and down by the

foolish fires of their own Sensual apprehensions. In wicked men there is a *Democracy* of wild *Lusts* and *Passions*, which violently hurry the Soul up and down with restless motions. All Sin and Wickedness is *στάσις καὶ ὕβρις τῆς ψυχῆς*, a Sediton stirred up in the Soul by the Sensitive Powers against Reason.

他方、悪しき者たちは、もっぱら「思いなしの生」を生き、彼ら自身の感覚的理解という無知蒙昧な火によって上へ下へと翻弄される。悪しき者たちのなかには野蛮な情欲・情念どもの民主制があり、それらは休みなき働きかけによって魂を上へ下へと乱暴に駆り立てる。およそ罪と悪とは、「魂の内乱であり暴動」である。すなわち、感覚的な諸力によって魂のなかにかき立てられる、理性に対する反乱である<sup>40</sup>。

「思いなしの生」という文言の出典は示されていないが、シンプリキオスの『アリストテレス 靈魂論注解』に同様の文言が認められる<sup>41</sup>。ポリスと個人の魂における民主制状態に対する批判については、プラトンの『国家』に明らかである<sup>42</sup>。パトリデスは、ルネサンス期において一般に民主制を拒絶する傾向があり、スミスの見解はそれと軌を一にしていることを指摘する<sup>43</sup>。スミスは理性に対する反乱について、翻ってソロモンの言葉を引用する。「奴隷が馬に乗って行くかと思えば、君侯が奴隷のように徒歩で行く」（コヘレト10章7節、新共同訳）。スミスの見るところでは、悪しき者たちの魂はその諸感覚に隷属する奴隷にすぎない。「感覚的理解」に対する批判は、感覚的知覚のみを認める経験論に対する批判であろう。感覚的・自然的経験だけに偏らない、経験の全体を包含するところの経験を考えるべきである。自然的経験の他に霊的・精神的経験もある、というのがスミスの立場である。

スミスにとって、真の宗教において理性がしめるべき地位は決定的に重要である。宗教は理性を消滅させるという考えは、一般受けするかもしれないが、真の宗教に関するかぎり、それは虚妄である。真の宗教は理性をいっそう活力あるものとし、それと親密な交わりの中かに生きる者の理性を大いに拡大する。スミスはこの点を明確にするために、プルタルコスに言及し、理性は人間が神と交わることを可能とし、これが他の動物とくらべて人間が正式に異なる点であるという。他の動物には「神を思惟することが起こらない」が、人間には神を知ること・感じる事が起こりえる<sup>44</sup>。さらにスミスはキケローにも言及し、理性は「神と人間との絆」であると言う。プルタルコス、キケロー、その他同様な考えをもつ多くの人たちにとって、「理性的動物と宗教をもつ動物」とは同等の意義をもつ。

*Reason*, as enabling and fitting Man to converse with God by knowing him loving him, being a character most unquestionably differencing Man from Brute creatures.

理性は、人間が神を知り神を愛すことによって神と交わりをもつことを可能ならしめ、それにふさわしくするものであり、それが人間を野獣からもっとも疑問の余地なく区別する特徴である<sup>45)</sup>。

スミスにとって理性は、神との親密な交わりのためになくてはならないものである。それは、理論的理性というよりむしろ生きて働く実践的理性である。理性と信仰の一致・不可分離を支持するスミスの立場は、経験論哲学とピューリタニズム宗教運動に対する挑戦である。実験を重視する経験論哲学と信仰を強調するピューリタニズムは、内容上は大きく異なるにもかかわらず、両者は理性と信仰を分離するという点では一致している。経験論は、宗教への尊敬という口実のもとに信仰の世界を聖域とし、理性の世界から遠ざけた。ピューリタニズムは、理性は信仰を妨害するものとして、信仰の領域から理性を排除した。他方、スミスにとって信仰は、信仰と理性の境界線をもたない。霊的なものこそは、もっとも理性的なものである<sup>46)</sup>。反理性的なもの（ピューリタン・カルビニズム）は、反霊的なものである。反霊的なもの（経験論哲学）は、反理性的なものである。

この箇所においても、スミスが引用する聖書箇所は一つだけである。あとはプラトンやプロティノスを始めとする古典古代の哲学者に基づいて、真の宗教の高貴性・卓越性の本質を論じている。先に2.1で述べたように、本質論の位相においては、哲学用語を使用することが適切であるとする、スミスの判断をここに見ることができる。

### 2.3 自己の超出と神との親密な交わり

*A Good man, one that is informed by True Religion, lies above himself, and is raised to an intimate Converse with the Divinity. He moves in a larger Sphere than his own Being, and cannot be content to enjoy himself, excepting he may enjoy God too, and himself in God.*

善き者、すなわち真の宗教によって活気を与えられる者は、自分自身を超出しており、神性との親密な交わりへ上げられる。彼は自分自身の存在よりも大きな領域のなかで活動する。神をも喜び、神において自分自身を喜ぶことなしには、自分自身を喜ぶことに満足することはできない<sup>47)</sup>。

ここで注目すべき点が二つある。一つは、スミスの理解では、善き者たちの自己超出とは自己否定である。ただし、神のための自己否定であり、理性の否定ではない。そこがピューリタン・カルビニズムと違う点である。理性の否定は、神的光源から発する光線の否定であ

り、ひいては神の否定となる。この点は哲学用語でよりよく説明できるとして、スミスはヒエロクレスを引用する。「理性に従うことは神に従うことである」「正しい理性に従うことと、神に従うことは同じことである<sup>48)</sup>」これに続いてスミスは、自己否定について自分の見解を語る。

But by *Self-denial* I mean, the Soul's quitting all its own interest in it self, and an entire Resignation of it self to him as to all points of service and duty: and thus the soul loves it self in God, and lives in the possession not so much of its own Being as of Divinity; desiring only to be great in God, to glory in his Light, and spread it self in his Fulness; to be fill'd alwaies by him, and to empty it self again into him; to receive all from him, and to expend all for him; and so to live not as his own, but as God's.

私の意味する自己否定とは、魂が自己に対するあらゆる自分自身の関心を放棄し、奉仕と義務のすべての点について、自分自身を神に完全に明け渡すことである。かくして魂は神において自己を愛し、自分自身の存在よりむしろ神性を所有して生きる。魂の願うところはただ、神において大いなるものであることであり、神の光を誇りとし、神の豊かさのなかで自分自身を拡大することである。いつも神によって満たされては、再び自己を神へと明け渡すことである。すべてを神から受け、すべてを神のために使うことである。そして自分自身の生ではなく、神の生として生きることである<sup>49)</sup>。

スミスにとって自己否定とは、神の意思に心から進んで仕えることであり、そこには強制はない。自己否定は、善き者がいだけ高尚な大志である。善き者は自己が無であり、神性がすべてであることを誇りとする。自己が無であることは、自己がすべてのものであるということであり、すべてのものを所有することへの確実な道である。

他方、悪しき者、すなわち真の宗教を知らない者の特徴は、自己愛である。真の宗教の統治下にある魂は、使徒パウロが言うように、「私は生きているが、もはや私が生きているのではなく、キリストが私の内に生きている」（ガラテヤ2章20節）とすることができる。これに対して、悪しき者は自己に執着し、自己充足をよしとする。この点においてスミスはストア派の見解を批判する。すなわち、彼らは自己を神のところに引き上げることができなかったので、反対に神を自己のところまで引き下ろし、神を自分たちと同格の偉大な動物、あるいは知者にしようとした。彼らは自己愛の領域を上へ下へと動き、神に依存しない生を公言している。出典は示されていないが、自己充足を説くセネカ『倫理書簡集』がスミスの念頭

にあると思われる。そこでは、「知者は自己充足している」(Se contentus est sapiens)、「知者が自己充足なのは、幸福に生きるためであり、単に生きるためではない」(se contentus est sapiens ad beate vivendum, non ad vivendum)、「しかし幸福に生きるために知者に必要なのは、健全で正しい魂、運命を軽蔑する魂のみである」(ad illud tantum animo sano et erecto et despiciente fortunam)<sup>50)</sup>と語られている。スミスは、宗教を排除して自己充足の領域に安住するあり方に異を唱える。そのような自己充足は、自己愛への耽溺にほかならない。真の宗教の活力によって、神のためにひたすら自己否定の道を前進することこそが、スミスにとって真に幸福な生への道である。

もう一つ注目すべき点は、スミスの理解によると、善き者たちの自己超出とは、神を享受し、神を喜び楽しむ経験である<sup>51)</sup>。神の享受とは、魂が、プロティノスの言う「命の源泉、知性の源泉、魂の根源<sup>52)</sup>」である神とこの上もなく親密かつ緊密に結合することである。これが真の宗教の精髓である。新約聖書に記されているように、魂が神の中に生き、動き、存在をもつ(使徒17章28節)ことを感じるとき、魂は最も高貴に生きている。善き者にこの喜ばしい感覚を与えることができるのは、真の宗教のみである。悪しき者たちは、この神の臨在感をもつことができないが、善き者は、プロティノスが「(神に)触れることができる者には、神の臨在がある」と言うように、心の内奥で神を親密に感じ、知ることができる。スミスにとって真の宗教とは、神を知ることであり、神を親密に感じ、神を喜ぶことである。それは新約聖書とプロティノスが、ひいてはプラトンが、声をそろえて証言していることである。

Religion is Life and Spirit, which flowing out from God who is the  $\text{Αὐτοζῶν}$  that hath life in himself, returns to him again as into its own Original, carrying the Souls of Good men up with it. The Spirit of Religion is always ascending upwards, and spreading it self through the whole Essence of the Soul, loosens it from a Self-confinement and narrowness, and so renders it more capacious of Divine Enjoyment.

宗教は命であり霊である。それは自分自身のなかに命をもつ「独立自存の命」である神から流出し、自分自身と共に善き者たちの魂を携えながら、再び自分自身の始原としての神のなかへ帰還する。宗教の霊はいつも上方に昇っていき、魂の本質全体にわたり自分自身を拡大していく。魂を自己拘束と狭隘から解放し、神の享受をもっと受容できるようにする<sup>53)</sup>。

「命と霊」は、『ヨハネによる福音書』において重要な役割をもつ概念である。「独立自存

の命」(Αὐτοζωή) という用語は、プロティノスが使用する形容詞形 αὐτοζῶν、「独立自存に生きている<sup>54)</sup>」の変形であろう。神からの流出と神への帰還という考え方は、プロティノスにおける一者・善・神から順次、知性、魂、神々、人間への流出と、翻って人間から神に向かつての上昇・帰還という思想に基づくものであろう。この上昇・帰還を得させるのが真の宗教であるが、その機能は、プラトンが『パイドロス』においてミュートスで語るところの、愛智者に備わり、愛智者を叡知界に飛翔させる翼に相当すると見ることができよう。

スミスにとって、神の甘美を心のなかで感じることは、やがて天国に行ってからのもではなく、今ここでもつことができる体験である。それは、聖書の言葉では「神と共に歩む」ということであり、善き者のまぎれもない特徴である。善き者の霊は、シンプリキオスが『エピクテトス要録』において言うように、「神的善の実体のなかにゆるぎなく固定されており<sup>55)</sup>」、つねに源泉なる善から飲み、いやましに満たされ、ついには神の豊かさにまで満たされる<sup>56)</sup>。

神の享受という体験は、ピューリタン・カルビニズムに欠けていたものである。この霊的体験は、教条主義、予定説、禁欲主義、厳しい正義の神という観念のもとに抑圧され、苦しめられていた当時の人々の魂を解放し、強制ではなく自由の、義務ではなく喜びの生としての宗教へ可能性を開いた。

### 3 真の宗教の特性・働き

スミスは真の宗教の卓越性を示すものとして7つの特性・働きを述べるが、彼独自の思考形式をよく表すものとして、第3番目を紹介する。

*The Third Property or Effect whereby Religion discovers its own Excellency, is this, That it directs and enables a man to propound to himself the Best End and Scope of life, viz. The Glory of God the Highest Being, and his own assimilation or becoming like unto God.*

That Christian in whom Religion rules powerfully, is not so low in his ambitions as to pursue any of the things of this world as *his Ultimate End*: his Soul is too big for earthly designs and interests; but understanding himself to come from God, he is continually returning to him again.

(真の) 宗教がそれ自身の卓越性を明示する第三の特質・働きは、これである。真の宗教は、善き者をして自分自身に人生の最善の目的・標的として、至高の存在である神の栄光と、彼自身の神への同化・神に似る者となることを提示するように向かわしめ、そ



れを可能にする。

その内において宗教が力強く統治するキリスト者にあつては、なんであれこの世のものをその究極目的として追求するほど、その諸大志は低劣ではない。彼の魂は、地上的な計画や関心を容れるにはあまりに大きすぎる。彼は自分が神から出た者であることを理解し、絶えず神のもとへ再び帰りつつある<sup>57)</sup>。

これまでスミスは、真の宗教を生きる者について「善き者」という表現を用いてきたが、ここに至り「キリスト者」(Christian)という表現を用いる。これまでの文脈から、彼がここで意味するキリスト者とは、真の宗教によって始動される善き者を指すことは明らかである。善き者としてのキリスト者は、神から出て神に帰る者である以上、その究極の目的をこの世のものに設定することはよもやしない。もしその魂が地上のものに従属するなら、シンプリキオス『エピクテトス要録』に書いてあるように、「そのとき魂の自由意思はまったく分裂したものとなる<sup>58)</sup>」したがって、個物的ではなく普遍的な目的をもつことが大事だとして、スミスはキケローの言葉を引用する。「あらゆるものは、より高邁な目的をもてばもつほどもっと高貴になる<sup>59)</sup>」至高の目的は魂を高貴にし、魂の容量をより普遍的で包括的なものに拡大し、神自身であるところの、一にして終りをもたない善を容れることができるようにする<sup>60)</sup>。かくして魂は、「すべてにおいてすべてを満たしている方の充満のなかで」生きる。出典は示されていないが、『エフェソの信徒への手紙』1章23節への言及である。スミスは目的がいかに重要であるかを、次のように説明する。

Every thing is most properly such as the *End* is which is aim'd at: the Mind of man is alwaies shaping itself into a conformity as much as may be to that which is his *End*; and the nearer it draws to it in the achievement thereof, the greater likeness it bears to it. There is a Plastick Virtue, a Secret Energy issuing forth from that which the Mind popounds to itself as its *End*, to mold and fashion it according to its own Model. The Soul is alwaies stamp'd with the same Characters that are engraven upon the *End* it aims at; and while it converses with it, and sets it self before it, *it is turned as Wax to the Seal*, to use that phrase in *Job*.

あらゆるものはもっとも本来的に、目指されている目的がそれであるようなそれである。人間の精神は、その目的であるものにできるだけ合致すべく、常に自分自身をかたち作っている。それが目的を成就する営みにおいて、目的に近づけば近づくほど、より多く目的に似たものとなる。塑造的アレテーというものがある。それは、精神が自分自身にそ

の目的として提示する当のものから流出してくる秘められた活力である。それは、精神を自分自身の範型にしたがって型どり、形作る。魂は、それが目指す目的の上なきざまれている刻印と同じものによって常に押印される。そして魂はその目的と交わり、それの前に自分自身を置くにつれて、ヨブの言葉でいえば、「蠟のように印章へと変えられていく<sup>61)</sup>」

スミスの思考の基底に、アリストテレスの「終り・目的」(τέλος) の概念がある。アリストテレスにおいて、終りは目的因であり、形相であり、現実態である<sup>62)</sup>。テロスは究極的目的である善<sup>63)</sup> なる神であり、可能態・質料としての魂は、真の宗教によってそれを希求する活力を与えられ、いやましに目的に似たものに変えられていき、現実態・形相へと近似していく。このような目的理解は、スミスの見るところでは、ヘブライ語聖書における『ヨブ記』(38章14節) にも比喩的に語られている。さらに、『創世記』(30章39節) において、ラバンの雌羊たちが水飲み場に来て、枝の前で交尾し、縞やまだらのものを産んだという記述があるが、それは善き者の魂の上昇・変容という霊的真理を象徴している。地上的なものを目的として追求する者は、「土に似た」(γεώδης) 者になっていくが、自分自身を神に志向させる魂はいやましに「神に似た」(θεοειδής) 者になっていく。Γεώδης という語は、プラトンに用例が見られる。『パイドン』では、物的なものにとりつかれた魂について次のように語られている。「この物的なものは重く、土に似たもので(γεώδες)、可視的なものとされなければならない。このような魂は、たしかにこれ(物的なもの)をもつので、重たくされて、かの見えないもの、ハデスを恐れて、ふたたび可視的なところに引き戻される<sup>64)</sup>」 Θεοειδής という語は、プロティノスに用例が見られる。「あらゆる者は、神と美を観照しようとするのであれば、まず最初に神に似た者(θεοειδής)、美なる者になるべきである<sup>65)</sup>」 スミスの見るところでは、以上のことを見事に語っているのは、使徒パウロである。「しかし私たちはみな、覆いを取られた顔で、鏡に映るような主の栄光を見ながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていきます<sup>66)</sup>」 この文言には「まさしく主なる霊から発するものとして(καθάπερ ἀπὸ κυρίου πνεύματος) という語句が続く。善き者の上昇・変容を現実化するの、聖霊の働きである。この聖霊は真の宗教の霊であり、善き者の魂における真の善であり、唯一の究極目的・最高善にほかならない<sup>67)</sup>。

以上に述べた、自分自身ではなく神を究極目的とする生の典型は、キリストの生であり、ある程度において、キリストの霊を分有する者としてのキリスト者の生である。神に似るということは、完全に神のために生きることであり、神の生を生きることである。新約聖書の言葉でいえば、「自分自身の生をキリストと共に神のなかに隠す」(コロサイ3章3節) ことである。これが言葉の真の意味における「神化」(θεώσις) である<sup>68)</sup>。

スミスは「神の栄光」について抱かれている誤解に対して批判を行う。多くの人は、神の栄光について自分勝手な考え、空想、想像をいだき、それにしがたって神の栄光を目指していると思ひなし、自分が描いた神の自画像に満足している。それは真の意味での神の栄光とは似ても似つかない。この批判の基底に、プラトン哲学における「思ひなし」(δόξα, ドクサ)を排し、ひたすら「真知」(ἐπιστήμη, エピステーメー)を追求する姿勢が見て取れる。それでは神の栄光のために生きるとはどういうことか? ここにおいてスミスは、「救い主キリスト」の教えを紹介する。

Our Saviour hath taught what it is to live to God's glory, or to glorifie God, viz. to be fruitful in all holiness, and to live so as that our lives may shine with his grace spreading it self through our whole man.

私たちの救い主は、神の栄光のために生きるとは何か、あるいは神の栄光を称えるとは何かを教えた。すなわち、それはあらゆる聖性において実を結ぶことである。そして、私たちの生が、私たちの全人を通して広がるキリストの恵みで輝くように生きることである<sup>69)</sup>。

スミスの念頭にあるのは、『ヨハネによる福音書』であろう。15章8節にキリストの言葉として、「このことにおいて私の父の栄光が現れる。すなわち、あなたがたが豊かな実を結び、私に学ぶ弟子となること」「豊かな実を結ぶ」とは、神の賜物としてのあらゆる聖性において実を結ぶことである。1章14節に「ロゴスは肉体となり、私たちのなかに幕屋を張った。私たちはその栄光を見た。父のもとから(派遣された)独り息子としての栄光であり、恵みと真理に満ちていた」とある。この文言もスミスの念頭にあると思われる。キリストが恵みに満ちていたのと同様に、善き者としてのキリスト者はキリストに似るにつれて、キリストの恵みに満たされていく。キリストの恵みで輝くということが、神の栄光のために生きるということである。

キリストは神の栄光を現す神の幕屋であった。同様に、真の宗教によって始動される善き者も、キリストの栄光を現す幕屋である。その真理は『ヨハネ福音書』のみならず、『出エジプト記』にも示されている、とスミスは解釈する。モーセが主なる神の命令通りに幕屋をつくったとき、主の栄光が幕屋に満ちた(40章34節)。神の命令通りに、ということは、モーセがシナイ山上で神の命令を受けとり、それに従ったように、善き者の精神と生の枠組みが、その存在の高みにおいて神の命令を、すなわちプラトンの言語におけるアイデア・範型を完全を受けとり、それに完全に従うということである。そうすることによって、善き者は、神の

栄光が宿りその栄光に満たされる神の幕屋となる。我々が聖性、正義、柔和などの聖書が示すアレーテにおいて、こよなく神に似た者になっていくということが、もっともよく神の栄光を現すということである<sup>70)</sup>。

スミスは、神の栄光ということをしるの観点からも考察する。神が自己の栄光を求めるとき、自己の外にある何かを欲するというのではない<sup>71)</sup>。神は宇宙・万物を創造したが、それは卑小なる人間から賛辞を受け取るためではなかった。神は完全に自己充足しているので、人間から何かを受け取る必要がない。神がこよなく愛するものは自己に「内在する栄光」であり、神が求めるものはそれを伝えることである。スミスはこれを説明するために、プラトンが語る「神の愛」に言及する。

As *Plato* sometimes speaks of the Divine love, it arises not out of *Indigency*, as created love does, but out of *Fulness* and Redundancy; it is an overflowing fountain, and that love which descends upon created Being is a free Efflux from the Almighty Source of love: and it is well pleasing to him that those creatures which he hath made should partake of it.

プラトンがときどき神の愛について語るように、それが生じるのは、被造物の愛のように貧窮からではなく、充満と余剰からである。それはあふれ出る泉であり、被造物に下るその愛は、愛の全能の源泉から流れる惜しめない流出である。神が創造した被造物が神の愛を分有することは、神にとって大きな喜びである<sup>72)</sup>。

この箇所は、善きもの・美しいものを希求する愛としてのエロースを主題として語る、『饗宴』におけるソクラテスとディオティマとの対話箇所への言及である<sup>73)</sup>。そこではエロースは、人間と神との中間にある神霊(δαίμων, ダイモーン)であり、神々には人間からのものを、人間には神々からのものを伝達する存在である<sup>74)</sup>。エロースは必然的に知を愛する者であり、知を愛する者であるがゆえに、必然的に全知者である神と無知なる人間との中間にある者である。それは、善きものが永遠に自分のものであることを目指し、恋い求める者である<sup>75)</sup>。人間が神に愛される者となり、不死となることができること、それが人間の幸福であり宝物である。その宝物を得るための助力者がエロースである<sup>76)</sup>。この箇所において、キリスト教の意味における「神の愛」は語られていない。「あふれ出る泉」に比せられる神の愛の概念は、プラトンにはない<sup>77)</sup>。しかし、スミスはプラトンのエロース論のなかから神の愛を読み取る。プラトンによると、エロースは豊富の神ポロス(Ploutos)を父、貧窮の存在ペニア(Penia)を母とし、両者から生まれた息子である。それゆえ、母の性質を受けて、欠乏・無知と同居

するものであるが、他面、父の性質を受けて、父同様に善きもの・美しいものを希求し、父のような知者になろうと熱望する<sup>78)</sup>。スミスの見るところでは、善き者としてのキリスト者が神を希求してやまないのは、神の性質を受けており、神に愛されているからである。善き者は神の愛によって始動され、神をひたむきに愛することに向かう。

惜しみなく流出する神の愛という見方は、『ティマイオス』における、宇宙万物の制作者・構築者 (δημιουργός, デーミウールゴス) なる神への言及であろう<sup>79)</sup>。プラトンにはデーミウールゴスの愛が宇宙万物を創造したという考えは認められないが、スミスは、デーミウールゴスのなかから、惜しみなく流出する愛と、その愛による万物の創造を読み取る。スミスは「神にはいかなる嫉妬もない」という言葉を引用する。おそらく『ティマイオス』(29E)への言及であろう<sup>80)</sup>。そこでは、宇宙万物の構築者としての神について次のように語られている。「(構築者)は善き者だった。しかるに、善き者には、いかなることについても、いかなる場合でも、嫉妬は起こらない。すなわち、このような嫉妬とは無縁であるから、すべてのものができるかぎり自分自身に似たものになることを望んだ<sup>81)</sup>」スミスの見るところでは、神は最高に善き者であるから、ギリシャ神話に登場する神々のように嫉妬したり、物惜しみすることはない。神の愛は必然的にあふれ流れ、万物を創造した。スミスの洞察によると、この真理は新約聖書によってよりよく表現されている。『ヤコブの手紙』に「神はすべての人に惜しみなく与える。けっしてとがめることはない」(1章5節)とある。かくして神は、善き者の心に、知恵、正義、節制といったプラトンのアレテーを惜しみなく刻印し、同時に、慈しみ、愛、平安、喜びといったキリスト教的アレテーを惜しみなく賜る。それが神にとっての神の栄光である<sup>82)</sup>。

したがって、神の栄光を追求するということを、翻って我々の観点から見ると、神の善に与るように努力し、神の完全性を熱心かつ不断に追求するということになる<sup>83)</sup>。

When conversing with him ἐν ἡσυχῶ ἐπαφῆ, by a secret feeling of the virtue, sweetness and power of his *Goodness*, we endeavour to assimilate our selves to him: Then we may be said to *glorifie* him indeed.

「静かな触れ合いのなかで」神と交わり、神の善の卓越性、甘美、力を心の内奥で感じるとき、我々は自分自身を神に同化しようと努力する。そのとき、我々は本当に神の栄光を現すのだといえるかもしれない<sup>84)</sup>。

「静かな触れ合いのなかで」(ἐν ἡσυχῶ ἐπαφῆ) という文言は、プロティノスへの言及であろう。『エンネアデス』においてプロティノスは、知性の本来的な活動について次のよう

に語る。「そのなかで（＝至高者のなかで）生きることは、知性の活動である。その活動は、かのもの（＝至高者）との静かな触れ合いのなかで（ἐν ἡσυχῳ τῇ πρὸς ἐκεῖνο ἐπαφῇ,）神々を生み、美を生み、正義を生み、アレテーを生む<sup>85)</sup>」この文言は、スミスにとって、神が善き者を自分自身に似たものに変え続け、善き者のなかで聖性の実を結び、かくして善き者のなかでその栄光を輝かす活動を示す。これが救いということである。救いとは、我々が自分自身の救いを追求し獲得することではなく、神の栄光が我々のなかに宿ることであり、神が賜る神の性質を我々が分有することである。それが天国ということである。天国・幸福は我々の外にある何かではない。天国とは、魂が神との親密な交わりのなかで、静かに神の善を感じ、翻って神を愛することに駆り立てられることである。スミスはプラトン及びプロティノスをこよなく愛する者として、次のように結ぶ。

We cannot be completely blessed, till the *Idea Boni*, or the *Ipsum Bonum* which is God, exercise its Sovereignty over all the Faculties of our Souls, rending them as like to it self as may consist with their proper Capacity.

我々が完全に幸福になることができるのは、神であるところの「善のアイデア」、または「善そのもの」が、我々の魂のすべての部分にその主権を行使し、それらの本来の受容力と一致するかぎり、それらを善そのものと似たものにするときである<sup>86)</sup>。

## おわりに

スミスにおける聖書と古代哲学の併用による論証は、単なる混合・折衷ではない。統合というのが正しいであろう。彼にとって聖書は、究極の善である神の豊かさを満々と湛える真理の源泉であり、宝庫であった。古代哲学はその源泉を掘り当てるために欠かせない道具であり、宝庫を開く鍵である。スミスの若き魂は、エマニュエル学寮においてプラトン、アリストテレス、プルタルコス、プロティノス、キケロー、シンプリキオスらをむさぼり読み、感銘を受け、それらの精神的豊かさを満喫した。その下準備があるからこそ彼は、硬直した聖書主義や無神論的宗教観のいずれにも偏らず、聖書の奥底に湛えられている深い意味をくみ取ることができた。ここにスミスにおける哲学的思考の型の特徴と、その実践的発現を見ることができる。

経験論哲学による新学問の雄叫びがとどろく時代にあつて、スミスのごとき古代哲学を多用する姿勢は時代錯誤に見えたであろう。しかし、古代哲学をこよなく愛し、熱心に読解したからこそスミスは、当時、見えなくなっていた宗教の深い次元を発見することができた。

厳しい正義の神、全的墮落、聖書主義、予定説、禁欲主義を主張するピューリタン・カル



ビニズムの見地からすると、スミスの説く善美なる神、善き者としてのキリスト者、聖書の比喩的理解、古代哲学の使用、明るい宗教観は、反キリスト教的に見えたであろう。これらこそは、真の宗教をして宗教たらしめるアレテーなのであるということ、当時の熱狂的宗教者の与り知らぬことであり、正当な評価は後の時代を待たねばならなかった<sup>87)</sup>。

政治紛争と神学論争が激しく錯綜した時代において、社会の前面から身を遠ざけ、ひたすら学寮での研究と学寮チャペルでの説教・講話に専念したスミスの姿は、同時代の活動家たちからは現実逃避に見えたであろう。しかし、表面的にはそうであっても、深い次元ではそうではない。スミスの哲学的思索の生は、魂が感覚的世界から離別し、善のアイデアである神のもとへ上昇していくにつれて、神に近似していくことにひたすら留意するものとして、真の宗教を生き抜こうとする真摯で積極的な天への道行きであった。

## 注

- 1) [Ed.] F. L. Cross and E. A. Livingstone, *The Oxford Dictionary of the Christian Church* (Oxford University Press, 1977), 271. F. J. Powicke, *The Cambridge Platonists A Study* (J. M. Dent and Sons Ltd., 1926), ix.
- 2) R. M. Jones, *Spiritual Reformers in 16th & 17th Centuries* (Macmillan and Co., Ltd., 1914), 288. “Latitude-Men” という呼称に関しては、cf. S. P. (おそらく Simon Patrick), *A Brief Account of the New Sect of Latitude-Men* (1662).
- 3) Cf. 新井 明・鎌井 敏和 共編『信仰と理性 ケンブリッジ・プラトン学派研究序説』(お茶の水書房、1998)。鎌井 敏和・泉谷 周三郎・寺中 平治 編著『イギリス思想の流れ 宗教・哲学・科学を中心として』(北樹出版、2001年)第2章「ケンブリッジ・プラトン学派とその周辺」25-48。
- 4) エルンスト・カッシーラー 花田 圭介 監修・三井 礼子 訳『ケンブリッジ学派の思想潮流 英国のプラトン・ルネッサンス』(工作舎、1993年) 53, 61。
- 5) スミスの説教・講話は、ギリシャ語、ラテン語、ヘブライ語による豊富な引用を含むが、ほとんどの場合、それらの英訳は示されていない。聴衆がクイーンズ学寮で古典古代を学ぶ生徒たちであり、それらの言語を理解することができたからである。Cf. H. G. Williams, ed., *Select Discourses: by John Smith* (Cambridge: at the University Press, 1859), xiv.
- 6) テキストは、C. A. Patrides, ed., *The Stradford- Upon- Avon Library 5 The Cambridge Platonists* (Edward Arnold, 1969) 145-199 に収録されたものを使用する。当時のスペリングが使用されているため、今日のものとは異なる場合があることを付言して

おく。

- 7) G. R. Cragg, ed., *The Cambridge Platonists*, 91.n.1.
- 8) スミスは欽定訳を使用している。
- 9) スミスはヒエロニムスの手紙としているが、文体から見て著者はヒエロニムスではない。むしろ、ノラのパウリヌスが著者ではないかと考えられている。
- 10) Cf. George Yule, *Puritans in Politics*, 75-76.
- 11) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 145.
- 12) Plato, *Respublica*, VI. 506B-509B.
- 13) Plotinus, *Enneades*, 3.7.7.
- 14) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 145-6.
- 15) 出典は示されていないが、ἔνδονはプロティノスが好んで用いる言葉である。Cf. *Enneades*, 1.1.10, 1.4.8., 1.6.3., 1.6.5., 1.6.8., etc.
- 16) Augustinus, *Epistulae*, 55.21.
- 17) Pseudo-Dionysius, *De coelesti hierarchia*, 1.
- 18) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 147.
- 19) Augustinus, *Epistulae*, 244, etc.
- 20) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 152.
- 21) Aristoteles, *Metaphysica*, 983a.
- 22) Plato, *Apologia*, 41D; *Phaedo*, 81C; *Laches*, 194D. Plotinus, *Enneades*, 3.1.10.
- 23) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 152.
- 24) Porphyrius, *Vita Plotini*, 1.1.1.
- 25) *Phaedrus*, 246A-249D.
- 26) *Phaedrus*, 248A-B. 日本語訳は『プラトン全集 5』（岩波書店、1974年）収録の藤沢 令夫 訳『パイドロス』を使用。
- 27) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 152.
- 28) *Phaedo*, 81C-D.
- 29) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 153.
- 30) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 153.
- 31) Proclus, *In Platonis Timaeum commentaria*, 173c: μόνος γὰρ καὶ ἐπὶ τῶν μερικῶν ζώων ὁ τὴν ἀρετὴν ἔχων ἑαυτῷ συγγίνεσθαι δύναται καὶ στέργειν ἑαυτόν.
- 32) このエピクロス理解は、俗説に沿うものであるが、正しいとはいえない。エピクロスは快楽を重視したが、放縦には反対した。Cf. A. A. ロング 著 金山 弥平 訳『ヘレニズム哲学—ストア派、エピクロス派、懐疑派—』（京都大学学術出版会、2003年）

- 92-104。
- 33) Plotinus, *Enneades*, 6.9.3. 原文は、ἐπί τε τὴν ἐν ἑαυτῷ ἀρχὴν ἀναβεβηκέναι 「自分自身のなかの始原へ上昇を遂げた」である。
- 34) Diogenes Laertius, *De vita et moribus philosophorum*, 7.86: τὸ κατὰ λόγον ζῆν ὀρθῶς γίνεσθαι «τού»τοις κατὰ φύσιν. 「理性に従って生きることが、自然に従って生きる者たちにとって正しいこととなる。」
- 35) Simplicius, *Commentarius in Enchiridion Epicteti*, 1.1.2.
- 36) Simplicius, *Commentarius in Enchiridion Epicteti*, 1.1.2. 原文は、πρὸς τε τὴν φυλακὴν τοῦ οἰκείου ἀξιώματος, καὶ πρὸς τὴν κατὰ φύσιν χρῆσιν τῶν οἰκείων ἐνεργειῶν, 「自分自身の榮譽の警護のため、および自分自身の活力の自然に従った使用のために」である。
- 37) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 154.
- 38) *Respublica*, 434C-445D.
- 39) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 154.
- 40) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 154.
- 41) *In libros Aristotelis de Anima commentaria*, 11.27.1: ἡ δοξαστικὴ ἐν ἡμῖν ζωὴ 「我々のなかにある思いなしの生」
- 42) *Respublica*, 555B-562A.
- 43) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 154.n.40.
- 44) Plutarchus, *Biographus et Philosophus*, 992.4.1.
- 45) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 155.
- 46) Cf. エルンスト・カッシーラー 『ケンブリッジ学派の思想潮流 英国のプラトン・ルネッサンス』 60-67。
- 47) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 155.
- 48) Hierocles, *Carmen Aureum*, 14. アレクサンドリアのヒエロクレスは、紀元430年頃に活動したギリシャ人新プラトン主義者である。
- 49) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 155.
- 50) Seneca, *Ad Lucilium epistulae morales*, 9.13.
- 51) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 156.
- 52) Plotinus, *Enneades*, 6.9.9. 原文は、πηγὴν μὲν ζωῆς, πηγὴν δὲ νοῦ, ἀρχὴν ὄντος, ἀγαθοῦ αἰτίαν, ῥίζαν ψυχῆς 「命の源泉、知性の源泉、存在の始原、善の原因、魂の根源」である。
- 53) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 157.

- 54) *Enneades*, 3.8.8.
- 55) Simplicius, *Commentarius in Enchiridion Epicteti*, 1.1.6. 原文は、ἀκινήτως ἐνιδρῦσθαι ἐν τῇ ὑπάρξει τῆς θείας ἀγαθότητος, 「神的善の實在のなかにゆるぎなく固定されている」である。
- 56) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 157.
- 57) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 165.
- 58) Simplicius, *Commentarius in Enchiridion Epicteti*, 1.1.10. 原文は、ἢ τὸ ἀυτεξούσιον ἀμφισβητήσιμον ἔχουσα, 「分裂した自由意思をもつ (欲求)」である。
- 59) 出典は示されていない。
- 60) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 166.
- 61) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 166.
- 62) 目的因としてのテロスについては *Metaphycica*, 994b9, 16 を、形相としてのテロスについては 1023a34 を、現実態としてのテロスについては 1051a16 を参照。
- 63) 善としての目的因については *Metaphycica*, 982b10, 983a32 を参照。
- 64) *Phaedo*, 81C: βαρὺ καὶ γεῶδες καὶ ὄρατόν ὃ δὴ καὶ ἔχουσα ἢ τοιαύτη ψυχὴ βαρύνεται τε καὶ ἔλκεται πάλιν εἰς τὸν ὄρατὸν τόπον φόβῳ τοῦ ἀιδούς τε καὶ Ἄιδου
- 65) Plotinus, *Enneades*, 1.6.9: Γενέσθω δὴ πρῶτον θεοειδῆς πᾶς καὶ καλὸς πᾶς, εἰ μέλλει θεάσασθαι θεόν τε καὶ καλόν. 同じ箇所にも、「アレテーの神に似た威光」(τῆς ἀρετῆς ἢ θεοειδῆς ἀγλαία) という表現も見られる。
- 66) コリント二 3章18節
- 67) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 167.
- 68) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 167.
- 69) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 168.
- 70) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 168.
- 71) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 169.
- 72) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 169.
- 73) *Symposium*, 201D-212C.
- 74) *Symposium*, 202D-E.
- 75) *Symposium*, 206A.
- 76) *Symposium*, 212A-B.
- 77) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 169.n.88.
- 78) *Symposium*, 203B-204A.

- 79) *Timaeus*, 29E-31B.
- 80) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 169.n.89.
- 81) *Timaeus*, 29E: ἀγαθὸς ἦν, ἀγαθῷ δὲ οὐδεὶς περὶ οὐδενὸς οὐδέποτε ἐγγίγνεται φθόνος· τούτου δ' ἐκτὸς ὄν πάντα ὅτι μάλιστα ἐβουλήθη γενέσθαι παραπλήσια ἑαυτῷ.
- 82) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 169.
- 83) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 170.
- 84) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 170.
- 85) Plotinus, *Enneades*, 6.9.9: τὸ δὲ ἐκεῖ ζῆν ἐνέργεια μὲν νοῦ ἐνέργεια δὲ καὶ γεννᾶ θεοὺς ἐν ἡσύχῳ τῇ πρὸς ἐκεῖνο ἐπαφῇ, γεννᾶ δὲ κάλλος, γεννᾶ δικαιοσύνην, ἀρετὴν γεννᾶ.
- 86) Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 171.
- 87) ケンブリッジ・プラトン学派の正当な評価、特にこの点におけるシャフツベリー (Anthony Ashley Cooper, 3rd Earl of Shaftesbury, 1671 ~ 1713年) の功績については、cf. エルンスト・カッシーラー 花田圭介 監修・三井礼子 訳『ケンブリッジ学派の思想潮流 英国のプラトン・ルネッサンス』152-188。

# The Pattern of the Philosophical Thought of John Smith

— The Discourse on The Excellency and Nobleness of True Religion —

MIKAMI Akira

## Abstract

This paper deals with the discourse on *The Excellency and Nobleness of True Religion* by John Smith (1618–52), a christian philosopher of the Cambridge Platonists. It aims to clarify the pattern of his philosophical thought in terms of the co-operation or the interaction of Christianity and philosophy. For this purpose we examine the following points in accordance with the order of the contents of the discourse.

1. The title and the Bible passage of the discourse.
2. The nature and essence of true religion.

The following three points are examined here. (1) The good man is driven to action by the power of true religion, and lives beyond mundane delights and glories. (2) The good man lives in converse with his own reason. (3) The good man goes beyond himself and is made to have an intimate fellowship with divinity.

3. The properties and operations of true religion.

This is the principal part of the discourse and examines the following seven points. (1) True religion makes the soul of the good man magnanimous. (2) True religion enables the good man to control self-will by the power of reason. (3) True religion enables the good man to live for the glory of God, the supreme existence and to become like God. (4) True religion brings to the soul of the good man the true serenity and the unspeakable joy. (5) True religion enables the soul of the good man to approach to God with holy boldness and to have an intimate fellowship with god with the humbleness of heart. (6) True religion raises the soul of the good man from the earthly things to the divine things, and from the sphere of senses to the sphere of wisdom. (7) True religion enables the soul of the good man freely to obey the providence and will of God.

The conclusion to be drawn from the above examination is that the



argumentation of Smith by means of the parallel use of the Bible and the ancient philosophy is not a mere mixture or compromise but is rightly called integration. To him the Bible was the original spring of truth filled with the abundance of God, the supreme good. Also to him the ancient philosophy was the indispensable instrument to dig out the original spring and also the key to open up the treasury. In the philosophical thought of Smith Christianity and philosophy are held in harmonious integration.

